

放送アーカイブから探る「上方」放送文化のメディア史的展開

JOBK のメディア史研究会 代表

丸山友美¹

¹法政大学大学院 社会学研究科 社会学専攻 博士後期課程3年（採択当時）

要約

本研究は、戦前・戦後を通じて大阪放送局（JOBK）で形成される「上方」放送文化を明らかにすることを目的に、「基礎調査」「音声資料の活字化」「番組分析」の三つの角度から研究を試みた。1年の調査・研究から、BKの放送人たちが自由な発想力と奇抜な想像力、そして地場の文化を駆使して、次々と新たな番組フォーマットを開発していった軌跡が見えてきた。

目 的

本研究は、戦前・戦後を通じて大阪放送局（JOBK）で形成される「上方」放送文化を明らかにすることを目的にもつ。これまで NHK の編纂した『放送史』は、東京放送局（JOAK）の足跡を放送全般の歴史と見なしてきた。AK とほぼ同時に放送を開始したにもかかわらず、放送史はBK・CK（名古屋）をNHKに従属する地方局とみなし、番組を生み出す磁場やオルタナティブな特性を軽視してきた。

申請者らは、2012-14年度に実施したNHKトライアル研究での漫才・ドキュメンタリー番組調査を通じて、BKの制作者が戦前・戦後を通じて「反中央=アンチ東京」という意識のもと独自性を確立し、娯楽と教養を結びつけていく「上方」放送文化の萌芽を確認した。2005年の社史発刊以来、JOBKにかんするまとまった研究は存在しないことから、本研究は番組資料と制作者の語りを収集・整理・分析することによって、メディア史の側面から戦前・戦後を通じてBKという放送空間で醸成されていく「上方」放送文化を考察する。

方 法

本研究は、上述の研究をすすめる重点作業として資料収集と番組関係者へのインタビュー調査を重視する。具体的な作業は、前期・中期・後期に分けて3つのテーマに取り組む。

■ 第一の作業「基礎調査の継続」：前期（4月-8月）

2016年度の調査では、大阪の市立天王寺図書館や府立中之島図書館、上方芸能資料館（ワッハ上方）、大阪歴史博物館と、東京の放送博物館、国立国会図書館、立教大学図書館で番組資料を調査した結果、映像・音声資料の所在確認と多数の文献資料を収集することができた。BKの制作者が娯楽と教養を結びつけていった「上方」放送文化を実証的に考察するため、2017年度前期（4-8月）はさらに多数のBK関係者が寄稿した雑誌『ラジオ・オーサカ』（1947年6月-?）、BK芸能部長佐々木英之助とその制作班の活動資料、1945-60年頃までの「組織年表」など、社史編纂の際に重要視された資料収集に取り組む。東京と大阪での継続的な基礎調査は、点在・散逸する番組資料の系統的な整理を可能にするだけでなく、番組関係者の所在調査を実施することで関西における研究ネットワークの構築・強化も目指している。

■ 第二の作業「音声資料の活字化」：中期（7月-2018年1月）

2016年度に研究ネットワークを構築することのできた関西で活動する「関西民放クラブ」「自由ジャーナリストクラブ」などへ協力を仰ぎ、番組資料（音声・映像、台本）の所在を確認し、番組のリスト化とそのデジタル化に取り組む。これまでの調査から、1980-85年にかけてBK草創期からテレビ放送開始期までに携わったOB61人がBK史を証言した音声資料が現存していることを確認した。この他、存命する放送関係者の

放送文化基金『報告書』平成28年度助成

所在確認と聞き取り調査を中期（7-12月）に実施し、これを活字化し、「放送史」から取りこぼされてきたBK制作者たちの声の史料化に取り組む。

■ 第三の作業「個別の番組分析」：後期（11月-2018年3月）

これまでの調査から、AKとBKが当番組で制作に取り組んだラジオ『社会の窓』（1948-）、ラジオ『時の動き』（1950-）、テレビ『日本の素顔』（1957-64）の3番組が、「上方」放送文化の特性を考察するうえで重要な番組であることを確認した。分析にあたっては、上述の3番組を発信局別に単に比較するのではなく、放送台本作家として活躍した秋田実（1905-77）が中心的役割を果たしたBK発信局のラジオ『上方演芸会』との連続性と断絶性から、「上方」放送文化の特性を把握していく。分析軸へ「娯楽」番組を挿入することによって、「教養」番組と「娯楽」番組との連続性を生み出すJOBKという磁場の役割を考察できるはずである。後期（11-3月）に取り組む、本研究の完成を目指す。

結 果

本研究は、上述の3つの作業テーマごとに研究を進めた。その成果は、以下のとおりである。

I. 「基礎調査の継続」（2017年4月-2018年3月）

2016年度には、大阪の図書館、上方芸能資料館の他、東京の放送博物館、国立国会図書館、放送ライブラリーの調査から、番組資料の所在確認と多数の文献資料を収集した。2017年度は、新たに多数のBK関係者が寄稿した雑誌『JOBKニュース』（57号～83号）を2017年大阪府立中央図書館の国際児童文学館で渉猟（2017年8月28日～31日の大阪調査）、追加の大阪資料調査（2018年3月18日～20日）、東京の放送博物館では、1945-60年までの「組織年表」や「人事異動」、「投書週報」（聴取者からの投書資料を書き出したもの）関連の資料の発見と筆写に取り組んだ。また、基礎調査で判明した点を2017年5月27日に関西社会学会で共同研究者の後藤が、2017年6月18日に新潟大学で開催された日本マス・コミュニケーション学会春季大会で丸山が報告を行った。

当初の計画では、基礎調査は2017年4月から8月までの作業テーマとしていたが、新たな資料が放送博物館（東京）で確認されたこと、インタビューの選定に必要な資料を継続して集める必要があったことから、結果として2017年度を通じてこれを行った。

また、2017年夏の大阪調査では、関西地区に多くが現存していると言われる「ラジオ塔」の調査も合わせて行った。①大和公園ラジオ塔、②大浜公園ラジオ塔、③住吉公園ラジオ塔、④大阪城公園ラジオ塔、⑤中崎遊園地ラジオ塔、⑥諏訪公園ラジオ塔を回った。各家庭にラジオ受信機が備わる前には、聴取者を公園や広場に集め、「団体聴取」が行われていた。この調査は着手したばかりのため、今後、どのように「上方」放送文化と結びつけることができるのか検討するつもりである。

II. 「音声資料の活字化」（2017年5月-2018年3月）

2016年度に研究ネットワークを構築することのできた、「関西民放クラブ」「自由ジャーナリストクラブ」などへ協力を仰ぎ、番組資料の所在を確認し、番組のリスト化とそのデジタル化のための準備を進めた。2016年度、BK草創期からテレビ放送開始期までに携わったOB61人がBK史について1980-85年に証言した音声資料が存在することを確認し、これを視聴することが今年度の最大の目的であった。結果として、音声それ自体の視聴には至らなかったが、近畿地区で存命する放送人への聞き取り調査を開始したことで、その個人所蔵の資料収集に着手することができた。OBの証言音声の視聴と活字化を目指し、今後も、この音声資料の調査は継続するつもりだ。

また、資料収集の関西での足場を築くため、「関西民放クラブ」および「自由ジャーナリストクラブ」メンバーの小山紳人氏（元BKカメラマン）と2017年5月30日に面談し、1995年と2005年に発刊された大阪社史の編集委員である大塚融氏（元BK放送記者）をご紹介いただいた。インタビューは、双方の都合をすり合わせて、2017年10月25日と26日に実施した。そこで、大塚氏が所蔵している資料のことやNHKが管理している資料の状況を詳しく伺った。大塚氏の所蔵している資料のデジタル化を提案したところ「是非」という回答をいただいたので、今後は、その資料の共有をはかっていきたい。両氏が東京にいらした際（2017年11月29日、12月11日、2018年2月17日）は、面談を重ね密に状況交換を行うようにした。また関西地区に在住する新聞・放送メディアのOBが定期的に関している「関西ジャーナリズム研究会」に2017年10月26日への参加が、小山氏と大塚氏の好意によって実現した。今後の関西調査では、ここで知り合うことのできた在阪メディアOBの力も借りながら、「上方」放送文化の情実を掘り起こしていきたいと考えている。

2017年10月25日のインタビュー後には、辻一郎先生（元新日本放送取締役編成局主幹、現在大手前大学評議

放送文化基金『報告書』平成28年度助成

員)と大塚氏、小山氏と会食し、元 BK の音響マン・西村やすし氏をご紹介いただいた。テレビ時代到来前の BK の状況を記憶する人物で、2018 年 1 月 6 日に京都で当時の様子について聞き取り調査を実施した。また、2018 年 2 月 28 日に辻一郎先生、3 月 1 日に元 BK 局長 (1990-91 年)・堀井良殷氏にインタビューを実施した。辻先生には、同時代の民放の状況を、堀井氏には BK の人脈の系譜・放送文化の全体像についてうかがった。

Ⅲ. 「個別の番組分析」(11 月-2018 年 3 月以降の作業テーマ)

AK と BK が当番組で制作したラジオ『社会の窓』(1948-54)、『時の動き』(1950-52)、『コミュニティー・ショー (ローカル・ショー)』、テレビ『日本の素顔』(1957-64)、JOBK 制作の演芸ラジオ番組『上方演芸会』(1949-)などに注目して資料の収集を行なった。

丸山は、BK のテレビ・ドキュメンタリー表現が、しばしば論じられてきたような「ラジオからテレビへ」という単線的なものではなく、「ラジオからテレビへ」「映画からテレビへ」という複線的なものとして見ていたことに注目し、分析を進めた。放送人の会が管理する番組制作者の証言をすでに得ていたことから、これに注意して、1945 年から 1953 年までの BK で展開することになるラジオにおけるドキュメンタリー表現の分析を進めた(成果 2、5)。また、後藤は、BK 草創期の放送台本作家である秋田實 (1905-77) や長沖一 (1904-1976) がかかわっていた番組の調査を進めることで、番組制作における人的・内容的な連続性と断絶性について検討を進めた。継続的な調査によって新たに確認した新資料「投書週報」は、制作者の語りだけではなく、それを聞いていた聴取者がどのように受け止めていたのか把握することのできる興味深いものである。番組の変遷、聴取者の反応、放送人の証言・著述などを突き合わせ、その分析を進めることで、誰がどのように BK の番組を聴いていたのか、聴取者の意見は番組にどのような影響を与え、そして反映されて行ったのか明らかにしている(成果 1、3、4)。

このように、それぞれのメンバーが資料を積み上げることを通じて、単なる「アンチ中央」「アンチ東京」という対抗意識から「上方」放送文化は生み出されたのではなく、ヴァナキュラーな声と音を伝えるものとして成立・展開してきたものと考えようになった。

この 1 年を通じて得た気づきは、B. アンダーソンが論じた「想像の共同体」の概念を応用して、放送電波ネットワークの拡充が「国民」を創出していったと指摘するものに、本研究は展開しないことを示している。そのような勢力に抗い、しばしば東京=中央と衝突してきたことで、「上方」放送文化は、その雑多な可能性や想像性を削ぎ落とされてきていったのではないかと、という新たな着想を得た。ただし、「上方」放送文化の魅力はそのように抑え込まれ、消えることはなかった。むしろ、そのように抑圧されるほど、BK の放送人たちは自由な発想力と奇抜な想像力、そして地場の文化を駆使して、次々と新たな番組フォーマットを開発していった。この底力こそ、「上方」放送文化を隆盛させたエネルギーのはずである。以上、提出した研究計画書に沿って研究を進めた。

参考文献

1) JOBK のメディア史研究会ホームページ (設立年月日: 2018. 2. 8) , <http://jobk-mediahistory.com>

成果の発表

- 1) 『ラジオに現れた「漫才」: 戦前期 JOBK における演芸番組の構成に着目して』後藤美緒、第68回関西社会学会、於神戸学院大学 2017年5月27日個人口頭発表
- 2) 『放送番組確定表から探る「上方」放送文化の成立: JOBKのメディア史研究にむけて』問題提起・丸山友美、司会・後藤美緒、討論・村上聖一、日本マス・コミュニケーション学会2017年春季大会、於新潟大学 2018年6月18日ワークショップ開催
- 3) 『漫才作者という生き方: 秋田實の新人会体験』後藤美緒、なにわ大阪の「笑い」、於関西大学なにわ大阪研究センター、2018年2月21日
- 4) 『大衆とつくるラジオ番組: 占領期における演芸番組「上方演芸会」を事例に』後藤美緒、第69回関西社会学会、於松山大学 2018年6月2日個人口頭発表
- 5) 『テレビ・ドキュメンタリー前史としての「録音構成」: 『街頭録音』と『社会探訪』の分析を中心に』丸山友美、日本マス・コミュニケーション学会2018年春季大会、於学習院大学 2018年6月23日個人口頭発表

連絡先

JOBK のメディア史研究会ホームページ、<http://jobk-mediahistory.com>

(2018 年 6 月 30 日提出)